

静かに始まり、静かに終わる。

そこに登場人物たちの世界や運命が変わる物語が内包されていなくてもいいが、それらが激しく、あるいは猛々しく語られることはない。

アメリカ東部に住む大学の教授ウォルターは、妻に先立たれ孤独な生活を送っている。ある日、ニューヨークで行われる学会に出席するため、マンハッタンにあるセカンドハウスにやってくる。すると、そこには若い男女のカップル、中東出身のタレクとアフリカ出身のゼイナブが住んでいる。彼らは仲介業者に騙され、金を払って住んでいたのだ。警察沙汰にしたくない理由のあった二人は自分たちの非を素直に認め、荷物をまとめて出ていこうとする。どこにも行く当てのない二人が悄然と部屋を出て行く姿を見て、ウォルターの心がうずき、一晩だけならと宿の提供を申し出る。

そこから、一日、また一日と延びていく、三人の奇妙な共同生活が始まることになる。

.....

リチャード・ジェンキンスが演じている、このウォルターと



いう初老の大学教授の孤独の深さがとりわけ印象的だ。彼の孤独の原因は恐らく妻に先立たれたことによるものではない。たぶん、それよりずっと

以前から孤独に蝕まれていたのだ。それはもしかしたら、自分の教えている経済学という学問が世界にとつて本質的なものではないということに気づいてし

叩くことから変わる世界

まったからかもしれないし、あるいは、妻や子供にとって自分は何者でもなかったのではないかと空虛感によるものだったかもしれない。そして、それは、どこかで自分が自分にとつて本質的な存在ではないのであったかもしれないのだ。

この映画の原題は「ザ・ビジター（訪問者）」という。しかし、私には邦題の「扉をたたく人」の方がはるかに奥行きがあるように思われる。ビジターが単数のところを見ると、訪問者はウォルターか、のちに息子を心配して訪ねてくるタレクの母親ということになる。だが、扉を叩くということになれば、それは登場人物のすべてということになるだろう。ウォルターが扉をノックし、タレクとゼイナブがノックし、タレクの母親がノックする。ノックする者は同時に扉をノックされる者にもなる……。

.....

若者タレクは、ジャンベと呼ばれる民族的な打楽器の演奏者でもある。共同生活をしているうちに興味を抱くようになったウォルターは、タレクにジャン

べの手ほどきを受けるようになる。ピアノの教師からは、楽器を習得する才能はないと引導を渡されていたウォルターが、まるで自分の心の奥の扉を叩くように、おずおずとジャンベを叩きはじめる。するとやがてウォルターは、楽器を演奏するということ、人と楽器を合奏するということによって、新しい自分と、新しい世界に目を開かれていくことになる。

物語は、ウォルターの小さな不注意からタレクが警察に拘束され、逃れてきた国へ強制送還されてしまうかどうかという問題にまで発展してしまう。それは9・11以降のアメリカの「不寛容」の現実が描かれることにつながるのだが、物語の重要な部分は、ウォルターが自身と世界に心が開かれる前半で描きつくされているようにも思える。あとは、映画的な結構を整えるためのものであるとさえ言えなくもない。

つまり、この映画は、太鼓を膝の間にさみ、手のひらで叩くというたったそれだけのことで、自身が、だから世界が変わる契機を掴み得るといって、ひとつの奇跡についての物語だったということでもいいのかもしれないのだ。